

日本国民文学全集 21

鷗外名作集

河出書房版

日本国民文学全集 第二一卷 鷗外名作集

定価三四〇円

昭和三十一年九月五日第二次初版発行

著者 森 鷗 外

発行者 河 出 孝 雄

印刷者 川 口 芳 太 郎

東京都港区芝三田豊岡町八



発行所 株式会社 河 出 書 房

東京都千代田区神田小川町三ノ八

電話(二九)三七二一番

振替東京一〇八〇二番

目次

鷗外名作集

キタ・セクスアリス

一

青 年

四二

雁

一三三

渋谷抽斎

一七三

舞 姫

二六二

うたかたの記

二九二

花 子

三〇二

妄 想

三〇六

	かのやうに	三二五
	阿部一族	三三〇
	佐橋甚五郎	三三七
	山椒大夫	三三一
	ぢいさんばあさん	三二六
	最後の一句	三三〇
	高瀬舟	三二五
	寒山拾得	三六三
年譜		三六九
解説	稲垣達郎	三九五
	装幀 原弘	

井タ・セクスアリス

金井湛君は哲学が職業である。

哲学者という概念には、何か書物を書いて
いるということが伴う。金井君は哲学が職業
であるくせに、なんにも書物を書いていな
い。文科大学を卒業するときには、外道哲学
と Sophistes 前のギリシヤ哲学との比較的研究
とかいう題で、よほどへんなものを書いた
そうだ。それからというものは、なんにも書
かない。

しかし職業であるから講義はする。講座は
哲学史を受け持っていて、近世哲学史の講義
をしている。学生の評判では、本をたくさん
書いている先生がたの講義よりは、金井先生
の講義のほうがおもしろいということであ
る。講義は直観的で、ある物の上に強い光線
を投げることもある。そういうときに、学生
はいつまでも消えない印象を得るのである。

ことに縁の遠い物、何の関係もないような物
をかりて来てある物を説明して、きく人がは
つと思つて会得するというような事が多い。
Schopenhauer は新聞の雑報のような世間
話を材料帳に留めて置いて、自己の哲学の材

料にしたそうだが、金井君は何をでも哲学史
の材料にする。まじめな講義の中で、そのこ
ろ青年の読んでいる小説なんぞを引いて説明
するので、学生がびっくりすることがある。

小説はたくさん読む。新聞や雑誌を見ると
きは、議論なんぞは見ないで、小説を読む。
しかしもし何と思つて読むかということを作
者が知つたら、作者は憤慨するだろう。芸術
品として見るのではない。金井君は芸術品に
は非常に高い要求をしているから、そこいら
じゅうにある小説はこの要求をみたすに足り
ない。金井君には、作者がどういう心理的状
態で書いているかということがおもしろいの
である。それだから金井君のためには、作者
が悲しいとか悲壮なとかいうつもりで書いて
いるものが、きわめてこっけいに感ぜられた
り、作者がこっけいのつもりで書いているも
のが、かえつて悲しかったりする。

金井君も何か書いて見たいという考えはお
りおり起る。哲学は職業ではあるが、自己の
哲学を建設しようなどとは思わないから、哲
学を書く気はない。それよりは小説か脚本か
を書いて見たいと思う。しかし例の芸術品に
対する要求が高いために、容易に取りつけない
のである。

そのうちに夏目金之助君が小説を書き出し
た。金井君は非常な興味をもつて読んだ。そ
して技癢を感じた。そうすると夏目君の「我
輩は猫である」に対して、「我輩も猫である」

というようなものが出る。「我輩は犬である」
というようなものが出る。金井君はそれを見
て、ついついいやになってなんにも書かずに
しまった。

そのうち自然主義ということが始まった。

金井君はこの流儀の作品を見たときは、格別
技癢をば感じなかった。そのくせおもしろが
ることは非常におもしろがった。おもしろが
ると同時に、金井君は妙な事を考えた。

金井君は自然派の小説を読むたびに、その
作中の人物が、行住坐臥造次顚沛、何につけて
も性欲的写象を伴うのを見て、そして批評が、
それを人生を写し得たものとして認めている
のを見て、人生は果してそんなものであるう
かと思つと同時に、あるいは自分が人間一般
の心理的狀態をはずれて性欲に冷淡であるの
ではないか、特に Frigiditas (性的不感症)
とでも名づくべき異常な性癖を持つて生れた
のではあるまいかと思つた。そういう想像は
Novels の小説などを読んだ時にも起らぬでは
なかった。しかしそれは Germinai (芽ばえ
の月) やなんぞで、労働者の部落の人間が、
困厄の極度に達したところを書いてあると
き、ある男女の逢引をしているのをのぞきに
行く段などを見て、そう思つたのであるが、そ
の時の疑いは、なんで作者がそういう処をわ
ざとらしく書いているだろうというのであつ
て、それがありそうでない事と思つたのでは
ない。そんな事もあるだろうが、それをなぜ

作者が書いたのだらうと疑うに過ぎない。すなわち作者ひとりの性欲的写象が異常ではないかと思うに過ぎない。小説家とか詩人とかいう人間には、性欲の上には異常があるかも知れない。この問題は Lombroso なんぞの説いている天才問題とも関係を有している。Molins 一派の人が、名のある詩人や哲学者を片端からつかまえて、精神病者として論じているも、そこに根柢を有している。しかし近ごろ日本で起った自然派というものはそれとは違う。大勢の作者が一時に起って同じような事を書く。批評がそれを人生だと認めている。その人生というものが、精神病学者に言わせると、一々の写象に性欲的色調を帯びているとでもいいそうなるのだから、金井君の疑惑は前よりよほど深くなつて来たのである。

そのうちに^{でい}出歯亀事件というのが現われた。出歯亀といふ職人がふだん女湯をのぞく癖があつて、あるとき湯から帰る女の跡をつけて行つて、暴行を加えたのである。どこの国にもたくさんある、きわめて普通な出来事である。西洋の新聞ならば、紙面のすみのほうの二三行の記事になるくらいのものである。それが一時世間の^{大問題}に膨脹する。いわゆる自然主義と聯絡をつけられる。出歯亀主義という自然主義の別名ができる。出歯亀という動詞ができて流行する。金井君は、世間の人々が皆色情狂になつたのでない限りは、自分

だけが人間の仲間はずれをしているかと疑わざることを得ないことになつた。

そのころある日金井君は、教場で学生のひとりが *Jerusalem* の哲学入門という小さい本を持つてゐるのを見た。講義の済んだとき、それを手に取つて見て、どんな本だと問うた。学生は、「南江堂に来ていたから、参考書になるかと思つて買つて来ました、まだ読んで見ませんが、先生が御覧になるならお持ち下さい」といった。金井君はそれを借りて帰つて、その晩ちやうど暇があつたので読んで見た。読んで行くうちに、審美論のところになつて、金井君は大いに驚いた。そこにこういう事が書いてある。あらゆる芸術は *Libido sexualis* (求愛) である。くどくのである。性欲を公衆に向かつて発揮するのであると論じてある。そうして見ると、月経の血がとまどいをして鼻から出ることもあるように、性欲が絵画になつたり、彫刻になつたり、音楽になつたり、小説脚本になつたりするということになる。金井君は驚くと同時に、こう思つた。こいつはなかなか奇警だ。しかし奇警ついでに、なぜこの説をも少し押し広めて、人生のあらゆる出来事は皆性欲の発揮であると立てないのだらうと思つた。こんな論をする事なら、同じ論法で何もかも性欲の発揮にしてしまふことができよう。宗教などは性欲として説明することが最も容易である。キリストを瘡だというのは普通である。聖者とあが

められた尼なんぞには、實際性欲を *pervert* (ねじけた) の方向に発揮したに過ぎないのはいくらもある。猥褻だなんぞという行をした人の中には、*Sadist* (虐待いん乱症病者) もあれば *Maocist* (被虐待いん乱症病者) もいる。性欲のめがねを掛けて見れば、人間のあらゆる出来事の発動機は、一として性欲ならざるはなしである。Cherchez la femme (女めを捜す) はあらゆる人事世相に応用することができ。金井君は、もしこんな立場から見たら、自分は到底人間の仲間はずれたことを免れないかも知れないと思つた。

そこで金井君の何か書いて見ようといふ、かねての希望が、妙な方向に向いて動き出した。金井君はこんな事を思つた。一性性欲というものが人の生涯にどんな順序で発現して来て、人の生涯にどれだけ関係しているかということを徴すべき文献ははなはだ少ないやうだ。芸術に猥褻な絵などがあるように、*Pornographie* (わいせつ文学、春画) はどの国にもある。姪書はある。しかしそれはまじめなものでない。すべての詩の領分に恋愛を書いたものはない。しかし恋愛は、よしや性欲と密接な^{関係}を有しているとしても、性欲と同一ではない。裁判の記録や、医者書いたものに、多少の材料はある。しかしそれは多く性欲の^{状態}ばかりである。Rousseau の懺悔記は随分思い切つて無遠慮に何でも書いたものだ。子供の時教えられた事を忘れる

と、牧師のお嬢さんがつかまえておしりをつ。それが何ともいえないいい心持をするので、知ったことをわざと知らない振りをして、間違った事を言ったり何かして、お嬢さんに打ってもらった。ところが、いつかお嬢さんが情を知って打たなくなったなどということが書いてある。これは性欲の最初の発動であって、決して初恋ではない。その外、青年時代の記事には性欲の事もちよいちよい見えている。しかし性欲を主として書いたものではないから飽き足らない。Casanovaは生涯を性欲の犠牲に供したといってもよい男だ。あの男の書いた回想記は一大著述であって、あの大部な書物の内容は、徹頭徹尾性欲で、恋愛などにまぎらわしいところはない。しかしナポレオンの名聞心がはなはだしく常人を超越しているために、その自伝が名聞心を研究する材料になりにくいと同じ事で、性欲界の豪傑Casanovaの書いたものも、性欲を研究する材料にはなりにくい。たとえばPlutarchのColossos〔巨像〕や奈良の大仏が人体の形の研究には適せないようなものである。おれは何か書いて見ようと思っているのだが、前人の足跡を踏むような事はしたくない。ちよいちよいから、一つおれの性欲の歴史を書いて見ようか知らん。実はおれもまだ自分の性欲が、どう萌芽してどう発展したか、つくづく考えて見たことがない。一つ考えて書いて見ようか知らん。白い上に黒く、はっきり

り書いて見たら、自分が自分でわかるだろう。そうしたらあるいは自分の性欲的生活がnormal〔正常〕だかanomalous〔変則〕だかわかるかも知れない。もちろん書いて見ない内は、どんなものになるやらわからない。したがって人に見せられるようなものになるやら、世に公にせられるようなものになるやらわからない。とにかく暇なときにぼつぼつ書いて見ようと、こんなふうな事思った。

そこへドイツから郵便物が届いた。いつも書籍を送ってくれる書肆から届いたのである。その中に性欲的教育の問題をある会で研究した報告があった。性欲的というのはおだやかでない。Sexualは性的である。性欲的ではない。しかし性という字があまり多義だから、不本意ながら欲の字を添えて置く。さて教育の範囲内で、性欲的教育をせねばならないものだろうか、せねばならないとしたところで、果してそれができるだろうかというのが問題である。ある会で教育家をひとり、宗教家をひとり、医学者をひとりという工合に、おのおのその向きのauthority〔權威〕とすべき人物を選んで、意見をたいたいのが、この報告になって出たのである。しかるに三人の議論の道筋はそれぞれであるが、性欲的教育は必要であるか、しかし、なし得らるであろうか、しかりという答に帰着している。家庭でするがよいという意見もある。学校でするがよいという意見もある。とにかくする

がよい、できると決している。教える時期はもとより物心がついてからである。婚礼の前に絵を見せるという話はわが国にもあるが、それを少し早めるのである。早めるのは、婚礼のすぐ前まで待つては、その内に間違ひがあるというのである。話は下級生物の繁殖から始めて、次第に人類に及ぶというのである。初めに下級生物を話すとはいうが、ただ植物の雄蕊雌蕊の話をし、動物もまたまたかくのごとし、人類もまたまたかくのごとしでは何の役にも立たない。人の性欲的生活をもくわしく説かねばならぬというのである。

金井君はこれを読んで、しばらく腕組をして考えていた。金井君の長男は今年高等学校を卒業する。かりに自分が息子に教えねばならないとなったら、どういったらよかろうと考えた。そして非常にむづかしい事だと思つた。具体的に考えて見れば見るほどことばを措くに窮する。そこで前に書こうと思つていた、自分の性欲的生活の歴史の事を考えて、金井君は問題の解決を得たように思つた。あれを書いて見て、どんなものになるか見よう。書いたものが人に見せられるか、世に公にせられるかより先に、息子に見せられるかということを検して見よう。金井君はこう思つて筆を取つた。

* * *

六つの時であつた。

中国のある小さいお大名の御城下にいた。鹿藩置県になって、県庁が隣国に置かれることになったので、城下はにわかに寂しくなった。

おとうさまは殿様と御一しよに東京に出ていらつしやる。おかあさまが、湛ももう大分大きくなったから、学校にやる前から、少しずつ物を教えて置かねばならないというので、毎朝かなを教えたり、手習をさせたりして下さる。

おとうさまは藩の時待士であつたが、それでも土塀をめぐらした門構えの家にだけは住んでおられた。門の前はおほりで、向こうの岸は上のお蔵である。

ある日おけいこが済むと、おかあさまは機を織っていらつしやる。僕は「遊んでまいります」という一声を残してかけ出した。

この辺は屋敷町で、春になつても、柳も見えねば桜も見えない。内の塀の上から真っ赤な椿の花が見えて、お米蔵のそばの奥橋に薄緑の芽の吹いているのが見えるばかりである。

西隣に空地がある。石瓦の散らばっている間に、げんげや堇の花が咲いている。僕はげんげを摘みはじめた。しばらく摘んでいるうちに、前の日に近所の子が、男のくせに花なんぞを摘んでおかしいといったことを思い出して、急に身のまわりを見まわして花をすてた。幸にだれも見えていなかった。僕はぼんや

りして立っていた。晴れたうらかな日であつた。おかあさまの機を織っておいでなさる音が、ぎいんと、ぎいんと聞える。

空地を隔てて小原という家がある。主人はなくなつて四十ばかりの後家さんがいるのである。僕はふいとその家へゆく氣になつて、表口へまわつてかけ込んだ。

草履を脱ぎ散らして、障子をがらりとあけて飛び込んで見ると、おばさんはどこかの知らない娘と一しよに本をあけて見ていた。娘は赤いものづくめの着物で、髪を島田に結っている。僕は子供ながら、この娘は町のほうのものだと思つた。おばさんも娘も、ひどく驚いたように顔を上げて僕を見た。ふたりの顔は真っ赤であつた。僕は子供ながら、ふたりの様子が當前でないのがわかつて、異様に感じた。見ればあけてある本には、きれいに彩色がしてある。

「おばさま。そりゃあ何の絵本かのう。」

僕はつかつかとそばへいった。娘は本を伏せて、おばさんの顔を見て笑つた。表紙にも彩色がしてあつて、見れば女の大きい顔が書いてあつた。

おばさんは娘の伏せた本を引たくつてあけて、僕の前に出して、絵の中の何物かを指さして、こういった。

「しずさあ。あんたはこれ何と思ひんさるか。」

娘は一層声を高くして笑つた。僕はのぞい

て見たが、人物の姿勢が非常に複雑になっているので、どうもよくわからなかつた。

「足じゃろがの。」

おばさんも娘も一しよに大声で笑つた。足ではなかつたと見える。僕はひどく侮辱せられたような心持がした。

「おばさま。又来ます。」

僕はおばさんの待てというのをきかずに、走つて戸口を出た。

僕はふたりの見ていた絵の何物なるかを判断する智識を有せなかつた。しかしふたりの言語拳動をひどく異様に、しかも不愉快に感じた。そしてなぜか知らないが、この出来事をおかあさまに問うことをはばかつた。

七つになつた。

おとうさまが東京からお歸りになつた。僕は藩の学問所の址にできた学校に通うことになつた。

内から学校へゆくには、門の前のおほりの西のはずれにある木戸を通るのである。木戸の番所の址がまだ元のまゝになつていて、五十ばかりのじいさんが住んでいる。女房も子供もある。子供は僕と同年くらいの子で、ぼろを着て、いつも二本棒をたらしめている。その子が僕の通るたびに、指をくわえて僕を見る。僕は厭悪と多少の畏怖とをもつてこの子を見て通るのであつた。

ある日本戸を通るとき、いつも外に立っている子が見えなかった。おれはあの子はどうしたかと思ひながら、通り過ぎようとした。その時番所^{ばんじょ}の家の中で、じいさんの声がした。

「こりい。そりよう持ってわやくをしちゃあいけんちゅうのに。」

僕はふいと立ち留まって声のするほうを見た。じいさんはあぐらをかいて草鞋を作っている。今しかったのは、子供がわらを打つ槌^{つち}を持ち出そうとしたからである。子供は槌をおいておれのほうを見た。じいさんもおれのほうを見た。濃い褐色^{かっしやく}のしわの寄った顔で、曲った鼻が高く、ほおがこけている。目はぎよろつとしていて、白目のうちに赤いところや黄いろいところがある。じいさんが僕にこういった。

「ほうさま、あんたあおとっさまとおつかさまと夜何をするか知っておりんさるかあ。あんたあ寝坊^{ねばう}じゃけえ知りんさるまあ。あははは。」

じいさんの笑う顔は実に恐ろしい顔である。子供も一しよになつて、顔をくしゃくしゃにして笑うのである。

僕は返事をせずに、逃げるように通り過ぎた。跡にはまだじいさんと子供との笑う声が残っていた。

道々じいさんのいった事を考えた。男と女とが夫婦になつていれば、その間に子供がで

きるといふことは知っている。しかしどうしてできるかわからない。じいさんの言つた事はその辺に關しているらしい。その辺になんだか秘密が伏在^{ふくざい}しているらしいと、こんなふうに考えた。

秘密が知りたいと思つても、じいさんの言うように、夜目をさましていて、おとうさまやおかあさまを監視せようなどとは思わない。じいさんがそんな事を言つたのは、子供の心にも profanation^{プロファナーション}〔神聖を汚すこと〕である、褻瀆^{せとく}であるというように感ずる。お社の御簾^{みすだ}の中へ土足で踏み込めといわれたと同じように感ずる。そしてそんな事を言つたじいさんがひどく憎いのである。

こんな考えはその後本戸を通るたびに起つた。しかし子供の意識はたえず応接にいとまあらざるほどの新事実^{しんじじつ}に襲^襲われているのであるから、長く続^{つづ}けてそんな事を考えていることはできない。内に帰^{かへ}つてゐる時なんぞは、たいいていそんな事は忘れていたのであつた。

十になつた。

おとうさまが少しずつ英語を教えて下さることになつた。

内を東京へ引き越すようになるかも知れないという話^{はなし}がおりおりある。そんな話のある時、聞^{きこ}耳を立てると、おかあさまがよその人^{ひと}に言うなとおっしゃる。おとうさまは、もし

東京へでも行くようになると、よけいな物は持つて行^いかれないから、物をより分けねばならないといふので、よく蔵^{くら}にはいつて何かしらつらつしやる。蔵は下のほうには米がはいつていて、二階^{にがし}に長持^{ながもち}や何かが入^いれてあつた。おとうさまのこのおしごと、客でもあると、すぐにやめておしまいになる。

なぜ人に言つては悪いのかと思つて、おかあさまに問うて見た。おかあさまは、東京へは皆行^いきたがつてゐるから、人に言うのは好くないとおっしゃつた。

ある日おとうさまのお留守に蔵の二階へ上がつて見た。ふたをあけたままにしてある長持がある。いろいろな物^{もの}が取り散らしてある。もつと小さい時に、いつも床の間に飾つてあつた鎧櫃^{よろいび}が、どうしたわけか、二階の真ん中に引き出してあつた。甲冑^{こうぐ}というものは、何でも五年も前に、長州征伐^{ちやうしゆせいふ}があつた時から、信用^{しんよう}が地に墜^{おち}ちたのであつた。おとうさまが古かね屋^{ふるかや}にでもやつておしまいなさるおつもりで、とうから蔵にしまつてあつたのを、引き出してお置^{おき}きになつたのかも知れない。

僕は何の気なしに鎧櫃のふたをあけた。そうすると鎧の上に本が一冊載^のつてゐる。あけて見ると、きれいに彩色^{さいしき}のしてある絵である。そしてその絵にかいてある男と女とが異様な姿勢^{いしやなせいし}をしている。僕は、もつと小さい時に、小原のおばさんの内^{うち}で見た本と同じ種類の本だと思つた。しかしもう大分それを見せられ

た時よりは智識が加わっているのだから、その時よりはよくわかった。Michelangeloの壁画の人物も、大胆な遠近法を使つてかいてあるとはいふが、こんな絵の人物には、それとは違つて、随分無理な姿勢が取らせてあるのだから、小さい子供に、どこに手があるやら足があるやらわきまえにくかつたのも無理はない。今度は手も足もよくわかつた。そしてかねて知りたく思つた秘密はこれだと思つた。

僕はおもしろく思つて、幾枚かの絵を繰り返して見た。しかしここに注意して置かなければならない事がある。それはこういう人間の振舞が、人間の欲望に關係を有しているといふことは、その時少しもわからなかつた。Schopenhauerはこういう事を言つてゐる。

人間は容易にさめた意識をもつて子を得ようとはかるものではない。自分の胤の繁殖に手を着けるものではない。そこで自然がこれに愉快を伴わせる。これを欲望にする。この愉快、この欲望は、自然が人間に繁殖をはからせる詭謀である。えさである。こんなえさを与えないでも、繁殖にさしかえのないのは、下等な生物である。さめた意識を有せない生物であるといつてゐる。僕には、この絵にあるような人間の振舞に、そんなえさが伴わせてあるといふことだけは、少しもわからなかつたのである。僕のおもしろがって、繰り返して絵を見たのは、ただまだ知らないものを知

るのがおもしろかつたに過ぎない。Naturgeschichte(好奇心)に過ぎない。Wissenschaft(知識欲)に過ぎない。小原のおぼさんに見せてもらつてゐた、島田鶴の娘とは、全く別様な眼で見たのである。

さて繰り返して見ているうちに、疑惑を生じた。それはあるからだの部分がばかに大きくかいてあることである。もっと小さい時に、足ではないものを足だと思つたのも、無理はないのである。一体こういう画はどここの国にもあるが、あるからだの部分をこんなに大きくかくといふことだけは、世界に類がない。これは日本の浮世絵師の発明なのである。昔ギリシヤの芸術家は、神の形を製作するのに、額を大きくして、顔の下のほうを小さくした。額は靈魂のやどるところだから、それを引き立たせるために大きくした。顔の下のほう、口のところ、咀嚼に使う上下のあごに齒なんぞは、卑しいからだの部分であるから小さくした。もしこつちのほうを大きくすれば、だんだんさるに似て来るのである。Cubismの面角がだんだん小さくなつて来るのである。それから腹の割合に胸を大きくした。腹があごや齒と同じ關係を有しているといふことは、別段に説明することを要せない。飲食よりは呼吸のほう、上等な作用である。その上昔の人は胸に、くわしく言えば心の臓に、血のめぐりではなくて、精神の作用を持たせていたのである。その額や胸を大きくし

たと同じ道理で、日本の浮世絵師は、こんな画をかく時に、あるからだの部分を大きくしたのである。それがどうも僕にはわからなかつた。

肉蒲団という、支那人の書いた、けしからん猥褻な本がある。おまけに支那人の癖で、その物語の組立に善悪の応報をこじつけてゐる。実にばかげた本である。その本に未央生という主人公が、自分のあるからだの部分の小さいやうだといふので、人の小便するのをのぞいて歩くことが書いてある。僕もそのころ人が往来ばたで小便をしていると、のぞいて見た。まだ御城下にも辻便所などはないので、だれでも道ばたでしたのである。そしてだれも小さいので、画にうそがかいてあると判断して、あつぱれ発見をしたやうなつもりでいたのである。

これが僕のおかしな絵を見てから実世界の観察をした一つである。今一つの観察は、少し書きにくい、真実のために書いて書く。僕は女のからだのある部分を目撃したことがない。そのころ御城下には湯屋なんぞはない。内で湯を使わせてもらつても、親類の家に泊まつて、よその人に湯を使わせてもらつても、自分だけが裸にせられて、使わせてくれる人は着物を着ている。女は往来で手水もしない。これにははなはだ窮した。

学校では、女の子は別な教場で教えることになつていて、一しよに遊ぶこともたえてな

い。もし物でも言う、すぐに友だち仲間で嘲弄する。そこで女の友だちというものはなかった。親類には娘の子もあったが、節句だとか法事だとかいうので来る事があつても、よそ行きの着物を着て、お化粧をして来て、おとなしく何か食べて帰るばかりであつた。心安いのはない。ただ内の裏に、藩の時に小人といったものが住んでいて、その娘に同年くらいなのがいた。名は勝といった。小さい蝶々髷を結っており内へ遊びに来る。色の白いほつぺたのふくらんだ子で、性質がごくすなおであつた。この子が、氣の毒にも、僕の試験の対象物にせられた。

さみだれの晴れたころであつた。おかあさまは相変らず機を織っていらつしやる。蒸し暑い午過で、内へ針しごとに来て、台所の手伝いをしてるばあさんは昼寝をしている。おかあさまの梭の音のみが、ひっそりとしてゐる家に響き渡っている。

僕は裏庭の蔵の前で、とんぼのしりに糸をつけて飛ばせていた。花の一ぱい咲いている百日紅の木に、せみが来て鳴き出した。のぞいて見たが、高いところなので取れそうにない。そこへ勝が来た。勝も内のものが昼寝をしたので、寂しくなつて出掛けて来たのである。

「遊びましょうやあ」

これがいさつである。僕はたちまち一計を案じ出した。

「うむ。あの縁から飛んで遊ぼう。」

こういつて草履を脱いで縁に上がった。勝もついて来て、赤い緒の雪踏を脱いで上がった。僕はまずはだして庭の苔の上に飛び降りた。勝も飛び降りた。僕は又縁に上がつて、しりをまくつた。

「こうして飛ばんと、着物が邪魔になつていけん。」

僕はかっぱつに飛び降りた。見ると、勝はぐずぐずしている。

「さあ。あんたも飛びんされえ。」

勝はしばらく困つたらしい顔をしていたが、無邪気なすなおな子であつたので、とうとうしりをまくつて飛んだ。僕は目を円くしてのぞいていたが、白いあしが二本白い腹に続いていて、なんにもなかった。僕は太いに失望した。Overallsでballetを踊る女のまたの間をのぞいて、羅に織りこんである金糸の光るのを見て、失望する紳士の事を思えば、罪のない話である。

その歳の秋であつた。

僕の国は盆踊りの盛んな国であつた。旧暦の盂蘭盆が近づいて来ると、今年は踊りが禁ぜられるそうだというわさがあつた。しかし県庁で他所産の知事さんが、僕の国のものに逆らうのはよくないというので、黙許するという事になった。

内から二三丁ばかり先は町である。そこに屋台が掛かつていて、夕方になると、踊りの囃子をするのが内へ聞える。踊りを見にいてもいいかと、おかあさまに聞くと、早くもどるなら、いってもよいというのであつた。そこで草履をはいてかき出した。

これまでもたびたびいったことがある。もっと小さい時にはおかあさまが連れて行って見せて下すつた。踊るものは、表向きは町のものばかりというのであるが、皆頭巾で顔を隠して踊るのであるから、侍の子がたくさん踊りに行く。中には男で女装したのもある。女で男装したのもある。頭巾を着ないものは百眼というものを掛けてゐる。西洋でするCarnaval(謝肉祭)は一月で、季節は違うが、人間は自然に同じような事をくふうし出すものである。西洋にも、収穫の時の踊りは別にあるが、そのほうには仮面をかぶることとはないようである。

大勢が輪になつて踊る。覆面をして踊りに来て、立つて見ているものもある。見ていて、氣に入つた踊り手のいるところへ、いつでも割り込むことができるのである。

僕は踊りを見ているうちに、覆面の連中の話をするのがふいと耳に入った。しりあいの男ふたりと見える。

「あんたあやうべ愛宕の山に行きんさつたらうがの。」

「うそを言いんさんな。」

「いいや。何でも行きんさったちゆう事じや。」

こういうような問答をしていると、今ひとりの男がそばから口を出した。

「あそこにああ、朝行つて見ると、いろいろな物が落ちておるげな。」

あとは笑声になった。僕はきたない物にさわったような心持がして、踊りを見るのをやめて、内へ帰った。

* * *

十一になった。

おとうさまが東京へ連れて出て下すった。

おかあさまは跡に残つておいでなすった。いつも手伝いに来るばあさんが越して来て、一しょにいるのである。少し立てば、あとから行くということであった。多分家屋敷が売れるまで残つておいでなすったのであらう。

旧藩の殿様のお邸が向島にある。おとうさまはそこのお長屋のあいっているのにはいつて、ばあさんを一人雇つて、御飯をたかせて暮らしておいになる。

おとうさまは毎日出て、晩になってお帰りになる。僕の行く学校をも捜して下さるということであつた。おとうさまがお出掛けになると、二十ばかりのかみさんが勝手口へ来て、前掛をふくらませて帰つて行く。これはばあさんが米を盗んで、娘に持たせてやるのであ

つた。後におかあさまがおいでになつて、この事が知れて、ばあさんはおい出された。僕はよほどぼんやりした小僧であつた。

一しょに遊んでくれる子供もない。家職のものの子で、年が二つばかり下なのがいたが、初めて逢つた日に、お邸の池の鯉をつらうといつたので、いやになつて一しょに遊ばない事にした。家扶の娘の十二三になるのを頭にして、娘が二三人いたが、僕を見ると遠いところから指さしなんぞをして、ささやきあつて笑つたり何かする。これもいやな女どもだと思つた。

御殿のお次に行つて見る。家従というものが二三人控えている。たいていたばこを飲んで雑談をしている。おれがいても、別に邪魔にもしない。そこでいろいろな事を聞いた。

最もしばしば話の中に出て来るのは吉原という地名と奥山という地名とである。吉原は彼らの常に夢みている天国である。そしてその天国の莊嚴が、幾分かお邸の力で保たれているということである。家令はお邸の金を高い利で吉原のものに貸す。その縁故で彼らが行くと、特に優待せられるそうだ。そこで手

ん手に吉原へ行った話をする。聞いていても半分はわからない。又半分くらいわかるようであるが、それがちつともおもしろくない。

中にはこんな事をいう男がある。

「こんだあ、あんたを連れて行つて上ぎようかあ。きれいな女郎がかわいがつてくれるぜ

え。」

そういう時にはみんなが笑う。

奥山の話は榛野という男の事に連帯して出るのが常になっている。家従どもはたいてい菊石であつたり、獅子鼻であつたり、反歯であつたり、満足な顔はしていない。それと違つて榛野というのは、色の白い、背の高い男で、髪を長くして、油をつけて、項まで分けていた。この男は何という役であつたか知らぬが、まず家従どもの上席ぐらいの待遇を受けて、文書の立案というような事をしていた。家従どもはこんな事を言う。

「榛野さあのように大事にしてもらわれれば、こつちとらも奥山へいくけえど、銭う払うて楊弓を引いても、ろくに話もしてくれんけえ、ほん詰まらんいのう。」

榛野はこの仲間の Adonis であつた。そして僕はほどなくこの男のために Aphrodite たり、また Penelope たる女子どもを見ることを得たのである。

お庭のせみの声のだんだんやかましゆうなるころであつた。おとうさまの留守にぼんやりしていると、涅槃という家従が外から声を掛けた。

「しずさあ。おりんさるかあ。今からお使に行けえ、一しょに來んされえ。浅草の観音様に連れて行つて上ぎよう。」

観音様へはおとうさまが一度連れて行つて下すつたことがある。僕は喜んでけたを引つ

掛けて出た。

吾妻橋を渡って、並木へ出て買物をした。それから引き返して、中店をぶらぶら歩いた。亀の形をしたおもちゃの糸でつるしたのを、たくさん持って、「器械の亀の子、選り取った選り取った」などといっている男がある。亀の首や尾や四足がぶるぶると動いている。涅槃は絵草紙屋の前に立ち留まった。おれは西南戦争の錦絵を見ていると、涅槃は店前に出してある、帯封のしてある本を取り上げて、店番の年増にこういふのである。

「おかみさん、これをだまされて買つて行くやつがまだありますか。はははは。」

「それでもちよいちよい売れますよ。一向詰まらない事が書いてあるのでございますが、おははは。」

「どうでしょう。本当のを売ってくれませんか。」

「御笑談をおっしゃいます。なかなか当節は警察がやかましゅうございまして。」

帯封の本には、表紙に女の顔が書いてあって、その上に「笑い本」と大字で書いてある。これはそのころ絵草紙屋にあったまじ物である。中には一口麻が何かを書いて、わざと秘密らしく帯封をして、かのおかしな画をはしがるものに売るのである。

僕は子供ではあったが、問答の意味をおおよそ解した。しかしその問答の意味よりは、涅槃の自在に東京詞を使ふのが、僕の注意を

引いた。そして涅槃はなぜこれほど東京ことばが使えるのに、お屋敷では国詞を使うだろうかというのを考えて見た。国ものどうしで国詞を使うのは、もとより当然である。しかし涅槃が二枚の舌を使うのは、そのためばかりではないらしい。彼は上役の前で淳樸を装うために国詞を使うのではあるまいか。僕はそのころからこんな事を考えた。僕はぼんやりしているかと思うと、又余り無邪気でないところのある子であった。

観音堂に登る。僕のことを知らたがる欲は、僕のことを、ただ真つ黒な格子の奥の、蠟燭の光のおぼつかないあたりに注がせる。しゃがんで、体を鰻のように曲げて、何かぐずぐずいって折っているじいさんばあさんたちのうしろを、堂の東側へ折れて、おりおりかちやかちやという賽銭の音を聞きすてて堂を降りる。

この辺には乞食がたくさんいた。その間に、五色の沙で書画をかいで見せる男がある。少し広いところに、大勢の見物が輪を作つて取り巻いているのは、居合ぬきである。涅槃と一しよにしばらく立って見ていた。刀が段段に掛けてある。下の段になるだけ長いのである。いろいろな事をしゃべっているが、なかなか抜かない。そのうち涅槃が、つと退くから、何かわからずについて退いた。振り返って見れば、銭を集める男が、近処へ来ていたのであった。

楊弓店のある、狭い巷に出た。どの店にもお白いをつけた女のいるのを、僕は珍しく思つて見た。おとうさまはここへは連れて来なかつたのである。僕はこの女たちの顔について、不思議な觀察をした。彼らの顔は当前の人間の顔ではないのである。今まで見た、普通の女とは違つて、皆一種の *eccentricity* (きまりきつた型) な顔をしている。僕の今のこゝとばをもつて言えば、この女たちの顔は凝結した表情を示しているのである。僕はその顔を見てこう思った。なぜ皆そろつてあんな顔をしているのであろう。子供にいい子をおしという、変な顔をする。この女たちは、皆その子供のように、変な顔をしている。眉はなるたけ高く、はなはだしきは髪のはえぎわまでつるし上げてある。目になるたけ大きくみはっている。物を言つても笑つても、鼻から上を動かさないようにしている。どうして言い合わせたように、こんな顔をしているのだらうと思つた。僕にはわからなかつたが、これは売り物の顔であつた。これは *prostitution* (売春婦) の相貌であつた。

女はやかましい声で客を呼ぶ。「ちいと、旦那」というのがもつとも多い。「ちよいと」とはつきり聞えるものもあるが、多くは「ちいと」と聞える。「紺足袋の旦那」なんぞというやつもある。涅槃は紺足袋をはいていた。

「あら、涅槃さん」
一きわ鋭い呼声がした。涅槃はその店には

いって腰を掛けた。僕はあきれて立って見て
いると、涅槃が手まねで掛けさせた。まる顔
の女である。物を言うとき、薄いくちびるの間
から、鉄漿をはがした歯が見える。長いきせ
るにたばこを吸いつけて、吸い口を袖でふい
て、例の鼻から上を動さずに、涅槃に出す。

「なぜふくののだ。」
「だって失礼ですから。」
「榎野でなくって、ふかないのは飲まして
もらえないのだね。」

「あら、榎野さんになってもいつでもふいて上
げまされ。」
「そうかね。ふいて上げるかね。」
こんなふうな会話である。ことばが二様の
意義を有している。涅槃は僕がその第二の意
義に対して、何等の想像をもえがき得るもの
とは認めていない。女も僕をば空気のごとく
に取り扱っている。しかし僕には少しの不平
も起らない。僕はこの女はいやであった。そ
れだから物なんぞを言ってもらいたくはな
かった。

涅槃が楊弓を引いて見ないかといったが、
僕はいやだといった。
涅槃は間もなく楊弓店を出た。それから猿
若町を通って橋場の渡しを渡って、向島のお
邸に帰った。

同じころの事であった。家従たちの仲間に、
銀林という針医がいて、折々彼らの詰所に来
て話していた。これはお上のお療治に来るの

で、お国ものではない。江戸児である。家従
はたいいて三十代の男であるのに、この男は
四十を越していた。僕は家従らに比べると、
この男がよほど賢いと思っていた。

ある日銀林は銀座の方へゆくから、連れて
行ってやろうといった。その日には用を済ま
せてから、銀林が京橋のそばの寄席にはい
った。

屋席であるから、あまり客が多くはない。
上品に見えるのは娘を連れて町家のおかみさ
んななどで、その外多くは職人のような男であ
った。

高座には話家が出てしゃべっている。徳三
郎という息子が象棋をさしに出ていた。夜が
ふけて帰って、しめ出しを食った。近所の娘
がひとりやはり同じようにしめ出しを食って
いる。娘は息子に話し掛ける。息子がおじの
内へいつて留めてもらうより外はないとい
うと、娘が一しよに連れて行ってくれろと頼む。
息子はきかず、にずんずん行くが、娘はついて
来る。おじは通物である。通物とは、道義心
の「*bonnie*」なる（ゆるんだ）人物ということと見
える。息子が情人を連れて来たものと速断す
る。息子が弁解するのを、恥ずかしいので言
を左右に托しているのだと思う。息子に恋慕
している娘は、もつめの幸と思っている。そ
こでふたりはおじに二階へ追い上げられる。

夜具は一人前しかない。解いた帯を、縦に敷
布団の真中に置いて、あとから書くので譬喩

が *anachronism*（時代錯誤）になるが、榎太を
両分したようにして、ふたりは寝る。さて一寝
入りして目がさめて云々というのである。僕
の耳には、また東京の詞は慣れていないのに、
話家はべらべらしゃべる。僕は後に西洋人の
講義を聞き始めた時と同じように、一しよ
懸命に注意してきいていると、銀林は僕の顔
を見て笑っている。

「どうです。わかりますかい。」
「うむ、たいいてわかる。」
「たいいてわかりやあたくさんだ。」
今までしゃべっていた話家が、たつて腰を
かがめて、高座の横から降りてしまうと、入
りかわって第二の話家が出て来る。「かわり
あいましてかわりばえもいたしません」と謙
遜する。「殿がたのお道楽はお女郎買いでござ
います」と破題を置く。それから職人がう
ぶな男を連れて吉原へ行くという話をする。

これは吉原入門というべき講義である。僕
は、なるほど東京というところは何の知識を
獲得するにも便利な土地だ、と感歎してき
ている。僕はこの時「おかんこを頂戴する」
という奇妙なことばを覚えた。しかしこのこ
とばには、僕はその後寄席以外では、どこで
も遭遇しないから、これは僕の記憶に無用な
負担を賦課したことばの一つである。

同じ年の十月ごろ、僕は本郷老岐坂にあつ

た、ドイツ語を教える私立学校にはいった。これはおとうさまが僕に鉱山学をさせようと思っていたからである。

向島からは遠くて通われないというので、そのころ神田小川町に住まっておられた、おとうさまの先輩の東先生というかたの内に置いてもらって、そこから通った。

東先生は洋行がえりで、摂生のやかましい人で、盛んに肉食をせられる外には、別にぜいたくはせられない。ただ酒を随分飲まれた。それも役所から帰って、晩の十時から十一時まで翻訳なんぞをせられて、そのあとで飲まれる。奥さんは女丈夫である。今から思えば、当時の大官であつた位閣門のおさまっていた家は少なからう。おとうさまはいい内に僕を置いて下すつたのである。

僕は東先生の内にいる間、性欲上の刺激を受けたことは少しもない。しいて記憶の糸をたぐって見れば、あるときこういう事があつた。僕の机を置いているのは、応接所と台所との間であつた。日が暮れて、まだ下女がランプをつけて来てくれない。僕はふいと立つて台所に出た。そこでは書生と下女とが話をしていた。書生はこういうことを下女に説明している。女の器械は何時でも用に立つ。心持に關係せずに用に立つ。男の器械は用立つ時と用立たない時とある。すぎたと思えば跳躍する。いやだと思えば萎靡して振わないというのである。下女は耳を真つ赤にしてきいて

いた。僕は不愉快を感じて、自分の部屋に帰った。

学校の課業はむづかしいとも思わなかった。おとうさまに英語を習っていたので、Auerとかいう人の字書を使っていた。独英と英独との二冊になっている。退屈した時には、Hembre〔身体の一部〕という語を引いて Zeugungsglied〔生殖器〕という語を出したり、puenda〔外陰部〕という語を引いて、Behan〔秘密の場所〕という語を出したりして、ひとりでおかしがっていたこともある。

しかしそれも性欲に支配せられて、そんな語をおもしろがったのではない。人の口に上せない隠微の事としておもしろがったのである。それだから同時に Tart〔へ〕という語を引いて Furtz という語を出して見て記憶していた。あるときドイツ人の教師が化学の初歩を教えていて、硫化水素をこしらえて見せた。そしてこのガスを含んでいるものを知っているかと問うた。ひとりの生徒が Fäule-Eier と答えた。いかにもくさった卵には同じにおいがある。まだ何かあるかと問うた。僕が起立して声高く叫んだ。

「Furtz! (く)」
「Was? (何か) Bille, noch einmal! (ふうか、もういちど)」

教師はやつとわかつたので顔を真赤にして、そんなことばを使うものではないと、懇

切に教えてくれた。

学校には寄宿舎がある。授業が済んでから、寄つて見た。ここで始めて男色ということを知った。僕なんぞと同級で、毎日馬に乗って通つて来る蘆小路という少年が、彼ら寄宿生たちの及ばぬ恋の対象物である。蘆小路はあまり課業はよくできない。薄赤いほつたがふっくりとふくらんでいて、かわいらしい少年であつた。その少年ということばが、男色の受身という意味に用いられているのも、僕のために新智識であつた。僕に帰り掛けに寄つて行けといった男も、僕を少年視していたのである。二三度寄るまでは、馳走をしてくれて、親切らしい話をしていた。そのころ書生の金平糖といった弾豆、書生の羊羹といった焼芋などを食わせられた。ただしその親切は初めから少し粘りがあるように感じて、いやであつたが、年長者に礼を欠いではならないと思うので、忍んで交際していたのである。そのうちに手を握る。煩摩をする。うるさくてたまらない。僕には Dribble〔男色者〕たる素質はない。もう帰り掛けに寄るのがいやになったが、それまでの交際の情力で、つい寄らねばならないようにせられる。ある日寄つて見ると床が取つてあつた。その男がいつもより一層うるさい拳動をする。血が頭に上がつて顔が赤くなっている。そしてとうとう僕にこういった。

「君、ちよつとだからこの中へはいつて一し